

2018年度 海外研究員成果報告書

1. 氏名 国際関係学部国際学科 准教授 和田 知久
2. 出張期間 2018年4月1日 ～ 2018年9月15日
3. 出張先 国立台湾大学文学院中国文学系
4. 所在地 中華民国台北市大安区羅斯福路四段一号

研究課題：1950年代台湾文学に関する制度研究

研修成果

この度の海外研究期間では、国立台湾大学文学院中国文学系に訪問学者として受け入れてもらい、中国文学系主任の梅家玲教授を始め、多くの先生方の指導を適宜仰ぎつつ、1950年代の台湾における文学制度に関する研究をおこなうことができた。

国共内戦敗北、台湾遷移以降の中国国民党政府による文学領域の管理統制、及び中国共産党政権に対抗する形での文学制度の再構築が如何に実施されたかについて、日本国内では入手、閲覧が困難な一次資料を用いて、文芸団体の創設や文芸雑誌の発行、褒賞制度の運営実態などについて調査、研究することを目指していたが、当初の目標はおおよそ達成できたと言ってよい。

5ヶ月強にわたる派遣期間において、以下に示すような研究成果を得るに至った。

一、一次資料の閲覧、入手と読解

今次派遣期間において、最も時間と精力を割いておこなった。主に台湾大学図書館、国家図書館、『文訊』雑誌社付設文芸資料研究及服務中心にて、日本国内では入手、閲覧が困難な文芸雑誌、研究誌、専門書を中心に収集、閲覧した。その中でも『文藝創作』（1951-1956）全68期を通覧、一部を複写にて入手できたことは所期の目的を達成したとともに、最大の成果である。入手とともに資料の読み込みを併行して進めた結果、当該雑誌の発行者である「中華文芸獎金委員会」が実施した創作奨励制度の実施状況についての詳細が明らかになるとともに、掲載作品の「反共抗ソ」要素の濃淡についても確認することができた。次いで『自由中國』（1949-1960）に掲載された文学作品、文芸批評、散文を閲覧し、一部を複写にて入手した。同雑誌は胡適と雷震によって創刊され、「反共」を謳いながらも同時に中国国民党による権威主義体制をも批判する自由主義的知識人にとっては言論の砦といふべき存在でもあったが、掲載された文学作品も同様に「反共」一辺倒ではなかったことを、作品を読み進めた結果改めて確認することができた。

また、両誌に掲載された作品を調査する中で、作家金溟若の特異性とその作品の魅力を発見するに至った。幼少期から日本で教育を受け、1930年代に上海で魯迅や許寿裳の知遇を得て新進作家として活躍した金溟若は、渡台後に両誌を含めた多媒体に教育現場を題材とした「反共」小説を執筆するものの、「反共」よりはむ

しろ台湾における国民党政権の施政に対する批判とも読めるような作品を多く執筆していたことが判明した。ところが台湾文学研究においては、金溟若はこれまでほとんど取り上げられることはなく、金溟若とその作品についての研究は今後の台湾文学研究の地平を開拓する上でも大きな意義を持つと思われる。金溟若の作品は、渡台後は翻訳家として活躍したこともあり、単行本が多く刊行されているが、図書館に所蔵されている以外は、今では入手が不可能なものがほとんどである。今次派遣期間を利用して、台北市内を中心とした古書肆などにおいて絶版となった金溟若の著書を手に入れることもできた。金溟若については、本学大学院国際人間学研究科発行『GLOCAL』第13号に小文が掲載予定である。

二、現地の文学活動への参加

首都であり文化の中心都市でもある台北では、文学関連活動も活発に開催されている。今回は長期滞在という利点を生かし、辛鬱『軽装詩集』発表会（4月29日、紀州庵文学森林）、水瓶子『台北漫歩』発表会（7月7日、古書肆永楽座）、坦雅『光之翼』簽署会（7月18日、欒樹下書房）など、新書刊行と併せて開催されるイベントや、台積電文学賞頒獎典禮（8月26日、孫運璿科技人文紀念館）などの文学賞授賞式に参加し観察調査をおこなうことができた。紀州庵文学森林は、日本統治期に建てられた料亭をリノベーションしたもので、現在は財団法人台湾文学発展基金が運営する文学関連のイベント開催の拠点であり、台湾政府の文化振興政策の一端をうかがうことのできるすぐれた施設である。また、現在台湾では永楽座や欒樹下書房のようにテーマを立てて、それに沿った書籍を揃え、それらを販売する傍らカフェサービスもおこなう形式のブックカフェが多く存在している。経営者には文学芸術専攻の大学院修了者などが多く、大学卒業者の就職状況がよくない中、自ら起業する同時代台湾の社会文化状況も窺い知ることができる。台積電文学賞は、現在台湾で唯一の中篇小説文学賞であり、台湾のみならず大陸、香港の若手作家の発掘をその宗旨としている。授賞式に、出版、報道関係者のみならず、一般からの参列者をネット上でも募集するなど、実施方法もユニークであった。

大学内でも文学関連講座が折々に開催されていた。例えば「科幻文學與當代生命情境」（6月8日、台湾大学）は、台湾大学中国文学系科幻日のメインイベントとして開催され、中興大学、高雄師範大学から3名の発言者を招き、中国大陸、日本、アメリカの科幻文学（SF文学）の歴史と現状について報告するものであった。近年の中国大陸の作家によるSF文学の隆盛を背景に、参加者も多く、講演後も熱心に議論を交わす姿が印象的であった。

その他、本学人文学部と国際関係学部との交流協定締結交渉の担当者として台湾大学日本研究センターの先生方とも交流を持つことができたこともあり、同センターが開催する学術活動にも参加することができた。「零至無限大：日本研究の可能性」（6月23日、台湾大学）は、同センターの協定交流先である名古屋大学大学院生との合同研究発表会であった。言語、歴史、政治、文学など多方面からの対台湾関係を含めた日本研究の成果は刺激的であった。

おわりに

中国同時代文学研究を専門としてきた私にとって、今回の台湾における海外研究はこれまでの自らの研究に不足していた視角や発想を補う非常に有益なものであった。近年取り組んでいる報奨制度を中心とした文学制度研究では、大陸の中国共産党政権下における創作扶助方案を対象としていたが、「国家が文学芸術に積極的に関与する」という近代中国に出現した極めて特異な文学制度を考察するにあたっては、中国国民党政権下の文芸施策とも比較検討することの重要性にも改めて気付くことになった。ただ、台湾文学研究についてはほぼ門外漢であったこともあり、今回の派遣期間中は専ら基本文献の読み込みと資料収集に力を注ぐことになった。その中で、第一線で活躍する先生方から折に触れて研究面での指導と助言を受けることができた。今回得られた「中華文芸獎金委員会による創作奨励制度」と「金溟若とその作品の分析」という研究テーマについては、所属する研究会、学会での研究発表と併行して論文化を進めていく予定である。